

新連載

社労士のための中国古典「易経」入門

～ 3000年の社長学に学ぶ、リーダーの要諦～

「易経」は紀元前10世紀頃に成立した東洋最古の文献です。古代から帝王学の書として組織のトップに読み継がれてきました。欧米では「Book of Changes (変化の書)」と呼ばれ、時代を生き抜くためのリーダーの原理原則を今に伝えています。社労士であると共に易経の講師も務めている筆者が、先生方の顧問先指導や事務所経営に活用いただける視点で、この古典の叢智を紹介いたします。



まごじ
孚事務所株式会社
代表取締役 飯田 吉宏 氏

社会保険労務士・中国古典講師。
 2004年社労士として独立起業。東洋哲学を基礎とした人間学・帝王学を専門とする。現在は「易経(中国古典)」のエッセンスを用いた人材開発を得意とし、社労士の知見も交えたリーダー・後継人材の育成支援に注力している。コンプライアンス・リーダーシップ系の研修と易経講座の講師をメインに、全国の商工会議所や法人会、仏教寺院など各種団体での講演・セミナー講師も務めている。

第1回

易経は東洋最古の社長学

皆様は「易経」という中国の古典をご存知でしょうか?中には「あ～易経か。占いの話だよ」と思われた方もいるかもしれませんが、たしかに易経は一般的に占いのテキストとして知られていますが、実は国王や政治家、一流経営者に親しまれてきた帝王学(リーダーの学問)の書でもあります。古来よりトップが組織を正常に統治していくための秘伝の書とも言うべき扱われ方をされてきたのです。

易経の歴史

易経は約3千年前の古代中国(周王朝)で成立した文献です。発祥は占いの書でしたが、長い年月を経て膨大な解釈が生まれ、内容が哲学化していきました。紀元前後の漢の時代に儒教の経典群である四書五経(論語や礼記・春秋など)の筆頭となり、東洋哲学は元より世界的にも第一級の思想書としての地位を確立しています。ちなみに孔子は晩年易経を大変好み、本のとじひもが何度も切れるほど易経を読み込んでいたという伝承が残っています(四字熟語「韋編三絶」のルーツ)。

日本の歴史上において極めて重要な文献に位置づけられ、リーダー・知識人の必修科目であると同時に、「明治」「大正」をはじめとする元号、「資生堂」「麗澤大学」などの企業名や学校・学術団体の名称の典拠にも採用されてきました。

最近ではプロ野球・北海道日本ハムファイターズの栗山英樹監督が著書で易経を愛読している事を告白されています(下記参照)。

「遠征先のホテルの部屋で、北海道の自宅で、何度『面白い!』と口に出したことが!易経に書いてあるのは様々な知恵であり、物事の解決方法です。(中略)

人生の本質は昔もいまも変わることはなく、対処法が時代に応じて変わっているだけなのだ、ということに思い当たりました」

(「栗山魂」河出書房新社 文庫版あとがき)

易経が教える64の物語

易経には他の主要な中国古典と比べ、一風変わった特徴があります。たとえば論語は孔子と弟子たちの問答録ですし、春秋は古代中国の歴史エピソードの記述が続いていきます。これらに対して易経は64の「時」の物語で構成されています。物語は「喜び」や「苦しみ」、「争い」など様々な「時」を通じ、人間や組織が直面するあらゆる状況を提示します。

西洋にはイソップ童話の「北風と太陽」のような寓話(ぐうわ) (たとえ話による人生訓)が数多くありますが、易経も自然現象や

動物の習性、古代史などをたとえに使うことで物語を展開しています。物語には、その「時」に特有の問題の解決策や判断の方向性、リーダーがその状況から学ぶべき視座が含まれています。つまり状況や変化における最適な行動指針を教えているため、現実と易経の内容を重ね合わせることで顧問先の組織や経営者、そして自身の状況を客観的に把握でき、問題や課題の解決に役立てることができるのです(図表参照)。

「時」の名前(物語)	具体的状況	対応テーマの例
沢火革・山嵐蠱	旧弊の一掃、体制の一新	働き方改革
天水訟・天地否	上下反目による紛争	労働トラブル予防
水風井・火風鼎	組織管理・仕組みのメンテナンス・専門家の活用	コンプライアンス体制の整備
天火同人・火天大有	目標・目的達成のためのトップのマネジメント	組織開発・チームビルディング
水雷屯・水火未濟	スタート時の混乱・困難、生みの苦しみ	創業・起業
乾为天・水火既濟	次世代への継続性の確保	事業承継・後継者教育
坤為地・火山旅	直面する状況への適応・向き合う姿勢の取り方	キャリア教育

社労士が易経を学ぶメリット

自らの立場を自覚し、状況に即した行動ができなければ、リーダーは務まりません。己を客観的に見つめるのは簡単なようで非常に難しい作業です。その意味で易経が古くから組織のトップに重宝されてきた理由がお分かり頂けるのではないかと思います。一言で言えば「東洋最古の社長学」です。

社労士の視点で考えると易経には組織を良い方向へ導くための知恵が沢山含まれています。これは労務管理・マネジメントそのものですから顧問先の指導に活用できます。また、ご自身の自己成長や事務所の人材育成の指南書にもなり得ます。

では、初回の結びにあたり、易経からこの一文をご紹介します。ぜひ読んでみてください。

「化してこれを裁(さい)する、これを爻と謂(い)い、推(お)してこれを行う、これを通と謂い、挙げてこれを天下の民に錯(お)く。これを事業という」

(易経「繫辞上伝」)

物事を状況に応じて適切に差配・変化させながら推進し、発展へと通じさせていく。そしてこれを天下の民(会社組織で言えば従業員)に据えて進む。これを「事業」と言います。私達が日々当たり前のように使っている「事業」の語源。世界最古の「事業」の定義です。この言葉ひとつを取っても、私達が易経を学ぶことの意義を感じて頂けるのではないのでしょうか。

(次号につづく)